かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 77 号

平成５年９月16日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

医大祭

問題提起〈臨床講義棟を考える〉…北　　進一…２
青春の日々……山村晃太郎…２
臨床講義棟を考える……飯塚　　一…３
多　様　性……久保　良彦…３
卒業生の動向……４
臨床薬理学「ツムラ」講座
開設にあたって……秋山　建兒…５
旭川医大に留学して……李　　万山…５
第19回医大祭……６
医大祭を終えて～俯瞰の存在～
第19回医大祭実行委員会委員長 …山　　英仁…６
第40回地区体……７
第36回東医体（夏季）……７
助教授に昇任して……鈴木　　裕…８
助教授に昇任して…見当識障害…久保田宗宏…８
助教授に昇任して……金子　茂男…９
助教授に昇任して……山崎　雅人…９
外国人留学生交流会
カナディアンワールドで実施される……10
臨床薬理学「ツムラ」講座開設される……10
第９回『音楽の夕べ』が行われる……10
開学20周年記念行事について……10
平成５年度　後期分授業料免除
及び延納・分納について……11
平成５年度　日本育英会奨学生の募集について ……11
学生教育研究災害傷害保険の加入について……11
「ビデオ」の貸出について……11
課外活動短信……12
教官の異動……12
窓　　外……葛西　眞一…12

問題提起　＜臨床講義棟を考える＞

広報誌編集小委員会委員　北　進一

いつの頃からか、臨床講義室（第一、第二）の入り口付近に長イスとテーブルが並び、講義中であるはずなのに常に数人、いや10数人の学生がたむろし、タバコを吹かしながら大声で話し、将棋、碁に熱中し、あげくは飲み物をどこからか運ばせている。

渡り廊下は学内関係者だけではなく、外部のいろいろな人々が通る。彼等には否応なくこの見苦しい光景が目に入る。何と思っていることか、案内するこちらがハラハラし、恥ずかしく腹立たしい。

講義には、いろいろな分野を専門とする方々に非常勤講師として教育に参画していただいている。講義中の「長イス族」の大声、出席カードへの群がり、そして露骨なエスケープ。「最近の学生は変わりましたねー」と、非常勤講師は皮肉を込めて嘆く。

講義を担当する教師は、学生にとって魅力ある講義内容に努める必要はある。学生もまた教師に対するエチケットと教室でのマナーの常識があれば、上記のごとき「長イス族」の出現もないはずである。世が世なれば「長イス族」は、縄でくくって学内引きずり回しの上、百叩き、打ち首、さらし首の刑に処するところである。

とにかく何とかしなければならない。世の中、常にそうであるが、ごく一部の外れ者のために全体の悪印象につながってしまう。

どうあるべきか、各学年ご担当の３教授にご意見をいただくこととした。

（歯科口腔外科学講座　教授）

青春の日々

第４学年担当　山　村　晃太郎

青春は人生の花の時期、やることが多く気も散り、時は一瞬のうちに過ぎ去る。講義などゆっくり聞いている暇はないという体験は私にも若い時にはあります。

しかし、私語は平気でする。途中から堂々と出てゆく（出席カード提出後）、この中には結構女子学生もおります。いちばん前に座って熱心に教科書を読んでいると思ったら、他の教科のそれであったという有り様。最近少々目に余ります。

もっとも、こちら側の講義自体が平凡で教科書を少々あさると書いてあるような内容故かとも思い、少々研究の最前線の話をするともうすぐ、居眠りが始まります。これは国試に関係するといえばカット目を剝き、聞き耳をたてます。

まるで専修学校の生徒のような気がしないでもありません。医学は人の健康を担う実学で完全な職業教育であることはよくわかっていますが、やはり大学生を対象とした教育である以上、学生さんにはもっと知的好奇心を持ってもらいたいと思います。

生命とは霊妙不可思議なもの、知れば知るほど実に良く造化の神様がお造りになったものです。これをQuestion and answer方式の勉強のみで片づけることのないように。たまには何か一つの教科くらい、講義のレベルを越えた勉強をしてみても良いではありませんか。

若さの特権とでもいったら良いのか、何かわからなくても何かに打ち込んだというのは後に益になることがあります。

皆さんはまだ若く、講義内容と実際とを比較して判断するという機会はまだないからわからないかもしれませんが、明解で学生さんに非常に人気のある講義が実は実地では全然役にたたなかったとか、またその逆もあります。

またある自説で、全てを律してその時はやや鼻持ちならない気がしたのですが、今になってみればあの位強烈にやらなければ駄目なのかもと考えさせられます。諸君、ともかく短い学生時代、少々我慢して受講すべし、これも人生修行の一環です。

教育とは所詮、人と場所と時代によって最大の効果があがるのでしょう。松下村塾しかり、クラークさんの札幌農学校しかり、あの短い時間でというのが、所詮教師の見果てぬ夢かも知れません。

（衛生学講座　教授）

臨床講義棟を考える

第5学年担当　飯　塚　　一

ゾウに関する実験というものがある。被験者はゾウについて鼻は何本ですかから始まり、足の爪は何本あるかまできかれる。この時、問われているもののサイズが大きいほど答えは早く、小さく局所的になるほど答えは遅くなる。これはヒトが頭の中でゾウのイメージを浮かべ、問いに応じてズームアップする作業を行なっているためである。この過程で時間がかかる。

事物を思いうかべるということは、このように内的イメージの存在を前提としている。いいかえると、その物に対するイメージがなければ答えは決して出てこない。

医学教育の目標は最終的に人体ないし疾患概念について、その時点での基準を学生に伝達することにある。どのような形であれ受け手の学生はゾウに相当するものを input していかなければならないし、教える側はうまくはめこんでいかなくてはならない。しかしながら事はそう簡単には運ばない。臨床実習が始まると、彼らは自分たちの知識、イメージがいかに少ないか、またあいまいなものであるかに驚くはずである。何しろ教えているこっちが驚く。

教育にあたって、講義が教科書よりすぐれている点はおそらく1つしかない。それは講義というものは決して教科書を読むようには語られないということである。意識するしないにかかわらず講義においては話し手のイメージに従ってある程度デフォルメされた描像が学生に伝えられる。これは同時に欠点にもなっているが、伝達の手段として中立的な教科書よりは、はるかに vivid なものが伝えられるはずである。よく文章は話すように書けと言われるが、話し言葉は決して書き言葉のようには語られないのである。

医学は現時点で科学というにはあまりにももろい基盤の上に立っている。教える側は良心的であろうとすればするほど断定を避け、あいまいにならざるを得ないという側面がある。学生が思っている以上に講義をする側は自分のしていることに不安を感じているものであって、学生の顔を見ながら、この言い方でいいのかな？と反応を見ている部分がある。途中で出入りする人間は、その過程で大切な教官と学生との緊張関係を壊しているということは認識すべきだろう。

旭川医大の学生は真面目さが「売り」であったはずである。それをくずして困るのは君たち自身のはずである。であるからして少し考えてもらいたい。このままでは非常にまずいんじゃないの？

（皮膚科学講座　教授）

多　様　性

第6学年担当　久　保　良　彦

難問が提起された。私にとってはこの種の問題はどんな大手術より苦手に思える。まともに取合えば大学教育のあり方という深みにはまり込んでもがき苦しむことになるだろうし、逆に軽く前で捌こうとすると、別に大した問題でなさそうに思えてきて問題提起者の熱意に背くことになる。しかし、私にはどうも後者の方が性に合っているな、など、あれこれ考えているうちにもう40年（正確には37～41年）も前になる自分の学生時代を想い出していた。

そういえば、基礎医学を教わった講堂も臨床講堂も階段教室であったが、出入口はすべて前方のみで教壇の真横左右にあった。遅刻すると何となく入り悪い。まして講義中途で出てゆくには当然断わりが必要と思われ、余程の緊急事態でも生じない限り出て行きずらい。

講義が始ってからの出入りを嫌い、出入口の扉に鍵をかける教授もおられたが、概ね教える側はそのようなことに無関心に見え、学生は静かであった。ただし、熱心にノートをとる者、夢境にさまよう者、他の科目の勉強をする者、果ては何故か決まって文学書を持込み読み耽る者など中味は様々で、その生態はいまとそう変りなかったように思う。

わが旭川医大の臨床講義棟をみるとき、先ず講義室出入口の配置が目につく。前後両面に出入口が設けられ、しかも後方のそれは出入り自由なホールか劇場なように広い。おまけにロビーまで付いている。このような設計は機能性や経済性が重視されたためであろうが、予防医学的見地からの配慮が欠けていたと思わざるをえない。この構造では学生に対し、講義に厭いたら自由に外でお休み下さいと促しているようなもので、目障りな一部の外れ者だけで済んでいるのが不思議な位である。

旭川医大出身者の評判は全国津々浦々私の知る限り、すこぶるよろしい。よく勉強する、よく働く、素直で従順、穏和で協調性がある、患者に優しい、などなど。これらは医師として極めて望ましい特性である。ただ、みていて余りにもよい子が揃い過ぎている。他流に伍して激しい競争に耐えられるのかどうか、むしろ心配になる程である。本学学生にはもっと多様性を求めてよいのではないか。

（外科学第1講座　教授）

卒業生の動向

去る３月25日㈭に本学を卒業した115名の勤務（連絡）先は次のとおりです。

また、３月に行われた第87回医師国家試験には本学卒業生127名が受験し、116名（平成４年度卒業生106名）が合格しました。　（学生課）

臨床薬理学「ツムラ」講座開設にあたって

客員教授　秋　山　建　兒

本年6月11日、臨床薬理学「ツムラ」講座が開設されました。本講座は道内の3医科大学のなかで最初に開設された寄付講座です。

臨床薬理学とは薬理学と臨床医学を結びつけた学問であり、ある病態下において薬物の使用を安全かつ有効に行なうことを目的とするものです。すなわち薬物の吸収・分布・代謝・排泄など薬動力学を研究するとともに、作用発現濃度と毒性発現濃度の関係、さらには薬物使用に際しての安全性、有効性、副作用などを検討するものです。適切で合理的な治療を行なうためにも臨床薬理学の果たす役割は非常に大きくなってきています。

本講座では特に漢方医学・東洋医学のよい点を西洋医学の中に取り入れ、漢方薬の薬効を臨床薬理学的に解明していくことに重点をおく予定です。各講座の御協力をいただいて研究成果をあげていきたいと考えていますのでよろしくお願い申し上げます。

学生の教育においては第五学年の後半に臨床薬理学の基本である、科学的根拠に基づいた薬物治療（モニタリング、効果判定、副作用、効果のメカニズムなど）を講義するとともに、漢方を主体とする東洋医学についても紹介する予定です。

ここで簡単に自己紹介をさせていただきますと、私は新潟県出身で本学の一期生として昭和54年に卒業し第二内科に入局、初代の故石井兼央教授、二代目の牧野勲教授の御指導を受けました。専門は消化器病学特に肝臓病学です。

講座は機器センターの4階に設置されました。医局と実験室の2部屋よりなり、教室の入り口に清水学長先生が揮毫された立派な看板がかかっています。スタッフは安部助手をはじめとして全部で6名でスタートいたしました。

この新しく開設された講座を主宰させていただきますことを大変光栄に存じ、微力ながら全力を尽くしてこの重責を全うする決意です。講座の開設にあたり大変多くの皆様にお世話になりましたことに衷心より感謝の意を表しますとともに、今後もより一層の御支援、御指導賜りますようお願い申し上げます。

旭川医大に留学して

李　　万　山

私は1991年11月より旭川医科大学麻酔・蘇生学教室に在籍させて頂いている、中国江西省南昌市出身の留学生です。私は1984年に江西医学院を卒業しました。江西省は中国の東南部に位置し、古代から美しい陶磁器と、美味しい蜜柑の産地として有名なところで、省都南昌市は人口150万人の温暖な都市です。

私が旭川医大に留学することになったのは、1990年4月に小川教授が訪中された折、広州の中山医科大学で先生の講演を拝聴したのがきっかけでした。講演のテーマは『日本における疼痛治療の現状』で、その内容は大変素晴らしく、世界をリードする日本の医療技術に大きな衝撃を受けました。中国では最近ようやく外来でのペインクリニックが始まったばかりで、麻酔科医である私にとって、日本への留学希望は抑えきれないものになっていました。その後小川教授のご尽力により留学が決まったときは、まさに夢のような心地でした。

さて旭川医大に来ての印象ですが、充実した医療設備と先端的な医療技術は来日前の想像をはるかに越えていて驚きました。また私の専門である麻酔技術の面でもレベルが高く、特に研究目的であるペインクリニックの分野では、各種神経ブロック療法や、硬膜外電気刺激法、色々な刺激装置、レーザー治療装置、PCAポンプなどを駆使し、各種難治性疼痛の治療に当っています。これらのすばらしい技術は、中国へのよいおみやげになり啓蒙に役立つものと確信しています。また針治療や漢方薬など中国伝統医学も積極的に取り入れて治療されているのには驚きました。

私はこの1年半の間に多くのことを学び、学会にも4回参加させて頂き，3回の論文発表もさせて頂きました。中国には『欲窮千里目、更上一層楼』という言葉があります。これは遠くを見極めるには、より高い所から見なければならないという意味です。私にとっての留学生活はまさにこの言葉の通りで、もっともっと勉強する必要を感じました。教授のご指導の下に、世界的レベルの麻酔技術とペインクリニック技術を学ぶことができ、本当に感謝しています。これからは残された期間を大切にし、できるだけ多く業績を残せるように努力したいと考えています。

第19回医大祭終る
テーマ
「光陰矢の如し」

模　擬　店

第19回医大祭は6月5日(土)～6日(日)の両日にわたって開催されました。

今年はスタッフ不足のため、規模の縮小を余儀なくされましたが、『気球遊覧』という新しい企画も登場し、模擬店、医学展、利き酒大会、サークル企画などが実施され、盛況のなか無事終了しました。

(学生課)

グリーンコンサート

大学祭を終えて～俯瞰の存在～

第19回医大祭実行委員会 委員長　山　　英仁

今年で19回目を向かえた大学祭も、6月5日、6日に行われ、盛況のうちに幕を閉じました。6月の北海道は例年にない天候不順が続き、日照時間は平年の半分程度で、農作物への影響も懸念されているそうです。

そんなわけで、今回企画されていた気球遊覧も、空模様を気にしながらの進行になりました。ところが、前日から明方まで降り続いていた雨も昼過ぎには、4日後に行われた皇太子殿下・雅子妃殿下の結婚の儀の時に降り続いた雨が、パレードの時には、

お　茶　会

上がった様に（例えが長いなぁ）降り止んだのです。風が若干あったので、徐々に高度を上げていきましたが、最終的には目的の高度に達することができ、旭川を上空から見渡せることができました。気球には、ほとんど乗る機会はありませんから、このコーナーは大盛況で、長い行列ができた程です。

俯瞰というのは、神の視点です。人々が空へ憧れるのも、神の視点を手に入れたいからだと思います。上空へ舞い上がり、下を見下ろすと、人々は小さく、校舎も手に取れる程となり、人生をすべて理解できる大きさへと移行していきます。しかし大人になるに連れ、空への憧れが薄れていくのは、そのような視点が存在しないのだということを知ったからだと思います。

ところで、このような企画があった今回の大学祭でしたが、人員不足による規模の縮小については、如何ともしがたいものがありました。来年は是非、前夜祭を復活させて欲しいと思います。しかし一方で、医学展については例年より充実していたようで、大学祭の存在を考える上では良い機会を得られたのかもしれません。11月5日には開学20周年を迎えて、来年で大学祭も20回目となります。これからの大学祭について僕も暖かく見守っていきたいと思います。

気球遊覧

最後になりましたが、今回の大学祭に御協力いただきました、関係各方面の皆様に厚く御礼申し上げます。

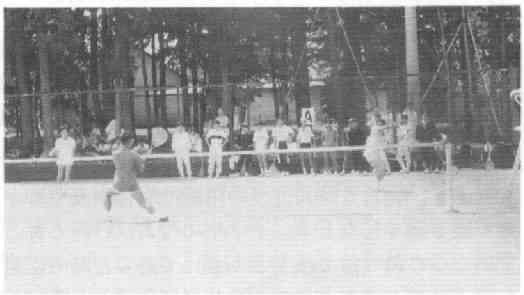
第40回　地区体
準硬式野球優勝なる！

第40回北海道地区大学体育大会は、北海道教育大学が当番校となり、48校が参加して7月9日(金)～12日(月)の4日間開催されました。

本学からは男子10種目、女子6種目に参加して熱戦を繰り広げ、準硬式野球が第37回大会に引き続き3度目の優勝に輝きました。

参加種目の成績は次のとおりです。

(学生課)



ソフトテニス

種目＼順位		優　勝	準優勝	3　位	**旭医大**
陸上競技	男	学院大	北　大	札教大	
	女	道女短	札教大	岩教大	
準硬式野球		**旭医大**	北海学園	学院大 北星学園	優　勝
ソフトテニス	男	学院大	樽商大	東日本大 北情報大	1　回　戦
	女	道女短	帯畜大	樽商大 静修女大	ベスト8
バスケットボール	男	道都大	学院大	函館大 北情報大	1　回　戦
	女	道女短	北星女短	酪農学園 武蔵女短	2　回　戦
バレーボール	男	帯畜大	札教大	学院大 酪農学園	決勝トーナメント2回戦
	女	道女短	旭教大	北海学園 静修女大	予選リーグ
サッカー		岩教大	室工大	旭教大 学院大	1　回　戦
卓球	男	道工大	北　大	釧工大 学院大	予選リーグ
	女	道女短	岩教大	樽商大 北星学園	予選リーグ
剣道	男	函館大	道東海旭	樽商大 酪農学園	予選リーグ
弓道	男	学院大	北　大	樽商大	
	女	酪農学園	学院大	帯畜大	
ハンドボール		樽商大	学院大	道工大	1　回　戦
総合	男	学院大	道都大	樽商大	6　位
	女	道女短	静修短	旭教大	13　位

第36回　東医体(夏季)
総合で4位につける

第36回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は、順天堂大学の主管で7月22日(木)～8月8日(日)まで35校が参加し、都内を中心に各競技が行われました。

本学からは男女あわせて、26種目に参加、ソフトテニス（女子）、卓球（女子）、バドミントン（男子）、弓道がそれぞれ準優勝、ゴルフ（男子）が3位に入賞し総合で4位につけ、冬季大会へ期待をつなぎました。

参加種目の成績は次のとおりです。　(学生課)

種目＼順位		優　勝	準優勝	3　位	**旭医大**
陸上競技	男	慶　応	弘　前	新　潟	
	女	新　潟	東　女	獨　協	
準硬式野球		自　治	東　大	北　大	4　位
テニス	男	自　治	順　天	千　葉	ベスト8
	女	群　馬	千　葉	筑　波	
ソフトテニス	男	信　州	自　治	千　葉	予選リーグ
	女	東　女	**旭　医**	新　潟	準優勝
卓球	男	新　潟	東　北	信　州	予選リーグ
	女	信　州	**旭　医**	山　形	準優勝
バレーボール	男	自　治	信　州	慈　恵	4　位
	女	筑　波	慈　恵	杏　林	予選リーグ
バドミントン	男	千　葉	**旭　医**	筑波 慈恵	準優勝
	女	新　潟	東　女	山形 杏林	
サッカー		順　天	自　治	東　海	
バスケットボール	男	自　治	弘　前	東　北	
	女	聖　マ	順　天	秋　田	
柔道		秋　田	札　医	信州 埼玉	予選リーグ
剣道		自　治	山　梨	福島 昭和	予選リーグ
弓道		信　州	**旭　医**	札　医	準優勝
空手道		千　葉	昭　和	日　本	
水泳	男	弘　前	筑　波	自　治	
	女	山　形	順　天	秋　田	
馬術		慶　応	日　大	東　大	
ハンドボール		昭　和	慈　恵	秋　田	予選リーグ
ゴルフ	男	弘　前	慶　応	**旭　医**	3　位
	女	日　大	昭　和	獨　協	
総合		自　治	新　潟	信　州	第4位

個人　弓道部　敢闘賞　6年　森川　守

助教授に昇任して

生化学第二　鈴木　　裕

私は昭和56年東京工業大学博士過程（生命化学専攻）を修了した後、ボストンバイオメディカル研究所（兼ハーバード大学）の研究員として約４年半を過ごし、その後旭川医科大学に赴任致しました。米国に長居することになるであろうと自身のグラントを貰って研究を始めておりましたが、幸い縁あって金沢徹教授の研究室にお世話になることになりました。研究分野は違いましたが、イオンを能動輸送するポンプ蛋白について優れた成果が金沢研究室から次々に発表されていることを以前より存じておりました。東工大－ボストン時代は、平滑筋の収縮性蛋白、特にミオシンの構造と機能に関する研究を行なっておりました。そしてミオシン分子の酵素的リン酸化および脱リン酸化に伴ってミオシンの分子構造が大きく変化することを明らかにし、またこの変化によって平滑筋の収縮・弛緩が制御されることを見い出しておりました。扱う蛋白こそ異なりますが、生化学第二講座においても私は、蛋白の構造と機能との関連をＡＴＰをエネルギー源とするイオンポンプについて明らかにする研究を行なっております。イオンポンプは生体膜に埋め込まれた膜蛋白で種々のものが存在しますが、これらは細胞内外のイオン濃度を適切に維持し細胞が正常な機能を営む上で本質的な、従って生命の維持に必須な基本的生理機能を担っています。これら膜蛋白がどのような基本構造を持ち、イオン輸送のためにその構造がどのように機能するか、また輸送はどのように制御されるか、を明らかにすることは究めて重要だと考えられます。また最近では、やはりＡＴＰをエネルギー源とするポンプ蛋白が、癌細胞の抗癌剤多剤耐性や血液脳関門での毒物排除においても本質的な役割を果たしていることが明らかとなってきました。生体膜ポンプ蛋白によるイオン、物質輸送についての興味は尽きないところです。

研究、教育、その他多方面に亙り助教授としての責任は重大ですが、全力を尽くす所存でおります。どうぞ宜しくお願い致します。

見当識障害

麻酔・蘇生学講座　久保田宗宏

旭川医科大学麻酔・蘇生学講座に勤務してから４ヵ月になりました。

旭川は高校卒業まで住んでおり、私の実家も昭和54年まで在ったので、札幌に住んでいても自分は旭川の住人のような感覚が強くありました。旭川に来ることが決まったときもすぐに慣れるだろうと思っておりました。たしかに旭川に来て２週間もすると意識がしっかりあるときの感覚は旭川に馴染んでしまいましたが、しかしまだ昼寝から目覚めて意識が朦朧としているようなときには自分がどこに居るのか判らなくなり、無意識の感覚のほうは旭川帰属を拒んでいるようです。

休日に旭川の街を散歩すると、突如タイムスリップしたような錯覚をおこさせるものに出会うことがあります。先日もマルカツの階段で胴体が長く脚が短く映る鏡を見たとき、小学生の時おばけ鏡と称していたこの鏡の前で級友とふざけて遊んだ時の記憶がすぐに蘇ってきました。当時は平和通りと呼ばれた買物公園に面したマルカツも木造３階建くらいの建物で、大町の私の家の前を走っていた電気軌道の電車で駅前まで乗り級友とよく遊びに来たものです。また、井上靖記念館の横に展示されている電車を見たときも、今の四条駅から東川まで走っていたこの電車に乗り、まだ動物園もなかった旭山公園や田園にポツリとあった東神楽の義経台まで遠足に行ったことをすぐ思い出しました。

実はこれと同様な感覚を呼び起こすものを札幌でも見かけました。札幌護国神社にある旧日本軍の歩哨の入る硝舎を見たとき旭川の護国神社か練兵場と呼ばれていた今の自衛隊の所のどちらかに置いてあったものだとすぐにわかりました。小学生の頃はまだ進駐軍がいて旧日本軍の戦車の残骸やこの様な硝舎が無造作に放置されており、子供の格好の遊び場になっていました。私の町内の子供達は大町、花咲町、本町、川端町、春光町、石狩川を遊びのテリトリーにしておりましたので、この硝舎は遊び道具のひとつでした。

どうやら私の記憶に強く残っている旭川は30数年前の旧いもので、このため新しい旭川に馴染まない感覚が生じるものと思われます。もう少し時間が経つと身心とも現在の旭川に馴染んで、昼寝から覚めても見当識を失うことはなくなると思っております。

助教授に昇任して

泌尿器科学　金子　茂男

本年３月に徳中助教授が退官されたため、八竹教授の御高配で４月に助教授に任ぜられました。当初は、今まで通りやっていれば何とかなると、のんびり構えていました。この４ヶ月余りの間、学内の委員会、学会関連の仕事、医局の運営等、仕事の内容が急速に変化し、それに適応するのに大慌てしております。改めて責任の重さを感じております。

さてこの紙面をお借りして簡単に自己紹介させていただきます。私は昭和49年に大阪大学を卒業しました。泌尿器科医としての本格的な研修は、卒後２年の研修を終えた３年目から近畿大学泌尿器科学教室で始まりました。当時、八竹先生は助教授として活躍しておられ、神経因性膀胱をはじめとするウロダイナミックスの研究に関して直接、指導していただきました。これがきっかけで私はウロダイナミックスという泥沼の世界にはまりこんでしまったのです。その後、八竹先生は本学へ赴任されましたが、私が留学から帰国後も泥沼からぬけだせないでいるのを見かねて（？）、旭川へ来ないかと声をかけていただきました。スキーは無免許ながら大好き、車は４駆というわけで1987年６月にこちらに赴任してまいりました。ところがこちらにもウロダイナミックス沼にどっぷりとはまりこんでいる宮田先生がおられ、ますます深みにはまりこんでしまったのです。その後は片足を沼に入れていた水永先生を深みに案内し、現在ではもっと仲間を増やそうと目論んでいるところです。

趣味といえば身体を動かすことなら大抵好きなのですが、理由があって野球だけはしないようにしています。本学赴任早々は富良野スキー場のシーズンパスを購入し、週末にはよく行ったものでしたが、花咲公園の乗馬倶楽部を見つけて以来、馬に狂い出し、最近では冬でもスキーより馬に乗る時間の方が多くなってきました。

この様に仕事、遊びとも充分に楽しませていただいております。現在の肩書きは、まだまだ重く感じますが、日々努め、内容を充実させていくしかありません。皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

助教授に昇任して

英　語　山﨑　雅人

英語とどうつきあうか。

今日、英語は英米語圏の人々が日常の言語として用い、また文学などの言語文化を築くいしずえとなっていると共に、国際的なコミュニケーションの手段として広く使われています。従って、英語を学ぶ目的はこの両者に応じたものが考えられます。すなわち、英米文化との違いを通して自分の言語や文化に対する相対的な視点を養うこと（いわゆる教養としての外国語学習）と、国際的な仕事を行うために意志のやりとりをする手段として身につけることです。かつての大学での外国語教育はもっぱら前者に傾きがちで、昨今「使える英語」が大学改革の目玉になっているのは、それへの反作用と言えます。こと本学では、将来英語を使うのは主に医療や医学研究のためと考えられますので、実用性をおろそかにしてはならないことは言うまでもありません。

その場合でも英語はあくまで目的遂行のための手段であり、大切なことは伝える内容です。いかに流暢に発音しようとも、聞く側は言われたことの中身でその人となりを判断するもので、それは母語の場合を考えてみれば明らかです。外国語というと、どのように言うか（文法的に、また発音が正しいか）が問題にされますが、やはり何を言うかで勝負が決まるもので、いかにその人なりの個性的な独自の意見を表わせるかという方が、国際的なコミュニケーションでは価値を持つように思えます。そのとき、広く教養として学んだことが役に立つと思います。

本当に使える英語が身につくかどうかは、英語でのやりとりが求められる場数をどれだけ踏むかによります。つまり、自分の仕事なり生活なりで、必要に迫られて「現場で」学んだことこそが真に身につく実践的な英語と言えるでしょう。たとえば、外国生活や国際会議などどうしても英語で話さなければならないという場合で、冷や汗をかいて学ぶところからが本当の勉強というものだと思います。

わたくし自身も、こうした道程をほんの一二歩踏み出したにすぎませんが、本学の学生諸君がさまざまな場面で苦労しながらも、英語との関わりを模索して行く一助になることができれば、と願っております。

外国人留学生交流会がカナディアンワールドで実施される

7月21日㈬本学で学ぶ外国人留学生と指導教官、チューター、職員との交流会が芦別市のカナディアンワールドで実施されました。

これは留学生の社会見学と、留学生のお世話をする本学のスタッフとの親善交流を兼ねたもので、留学生とその家族12名と本学のスタッフ12名がスクールバスでカナディアンワールドを訪れ、施設内を見学後、交流会が実施されました。

交流会では留学生による日本語での自己紹介や英語での懇談など大いに交流を深め、有意義な一時となりました。（学生課）

臨床薬理学「ツムラ」講座開設される

本学に医学分野では道内で初めての寄付講座が6月11日開設されました。

これは製薬メーカーの㈱ツムラから約3年間で1億円の寄付によるもので、漢方薬を使った治療を近代医学に広く応用していくのがねらいで、薬の副作用に関する研究を目的としています。

講座の責任者には、本学一期生の秋山客員教授が就任しました。

授業としては5年生の後半に臨床実習序論の中で、講義が予定されています。

第9回『音楽の夕べ』が行われる

9月4日㈯午後5時より、本学体育館において第9回『音楽の夕べ』が実施されました。

これは、本学の音楽系団体のブラスアンサンブル、ギター部、合唱部、室内合奏団、ジャズ研究会による合同コンサートで、会場には入院患者など約100人の聴衆が入場し、好評を博し終了しました。（学生課）

開学20周年記念行事について

本学は、昭和48年9月29日に設置されて以来・今年で20年を迎えることになりました。

これまで本学は、道民の大きな期待の中、関係各位の御支援御協力により、1600余名の卒業生を社会に輩出するなど、医学医療の中枢的役割を担う医科大学として発展充実してきております。

ここに、20周年という節目を迎えるにあたり、これまで至った足跡を振り返り、建学の理念を思い起こし将来を展望し、旭川医科大学がさらに飛躍する契機とするため、下記記念行事を計画しております。特に、記念フォーラムについては、旭川という地域に密接に関連のある興味深いテーマですので、ふるって御参加ください。（庶務課）

記

行事名	日時	場所
1)記念式典	平成5年 11月5日㈮ 午後4時	ニュー北海ホテル
2)祝賀会	平成5年 11月5日㈮ 午後5時	ニュー北海ホテル
3)記念フォーラム	平成5年 11月5日㈮ 午後1時	旭川大雪クリスタルホール（旭川市神楽3条7丁目）

平成５年度 後期分授業料免除及び延納・分納について

平成５年度後期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課厚生係で必要書類を受け取り、**平成５年９月１日（水）～９月22日（水）**までに申請してください。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

1. 授業料免除基準

(1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合

なお、平成５年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない（休学の理由による者は除く。）

(2) 授業料納期前６月以内（新入生については、入学前１年以内）において学生の学資を主として負担している者（以下「学資負担者」という。）が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合

(3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2. 申請書類

(1) 授業料免除申請書

(2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書

(3) 災害を受けた場合は罹災証明書（市区町村、警察、消防署が発行したもの。）

(4) 市区町村発行の所得証明書（給与所得者については、平成４年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成４年分の確定申告書（一面・二面）等の写し（生計を一にする家族全員分）を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。）

(5) 失業者は、民生員又は職業安定所の証明書

(6) 生命保険の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書

(7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者（申請者本人及び義務教育の就学者は除く。）の在学証明書

(8) 自動車保有に関する申立書

(9) その他家庭事情により参考となる証明書等

平成５年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、９月１日より公用掲示板に掲示しておりますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり、下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、**全員の加入を勧めています。**

まだ加入していない学生、保険期間の切れている学生は、できるだけ加入するようにしてください。

記

1. 受付期間　自　平成５年10月１日（金）
　　至　平成５年10月29日（金）

2. 受付窓口　教務部学生課厚生係

3. 保 険 料　6年間　3,400円　5年間　2,950円
　　4年間　2,450円　3年間　1,900円
　　2年間　1,300円　1年間　750円

4. 支払い保険金の種類と金額

区分／種類	正課中 学校行事中	学校施設内の休憩中学校施設内外の課外活動中（学校施設外の課外活動については、大学に届出た活動に限る。）
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺傷害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数４日以上が対象 6千円～30万円	実治療日数14日以上が対象 3万円～30万円
入院加算金	1日につき4,000円	1日につき4,000円

「ビデオ」の貸出しについて

エイズ関係ビデオ及び海外向け北海道紹介ビデオの貸し出しを行いますので、希望者は学生課厚生係へ申し出てください。

◎エイズ・ＨＩＶ感染症（ＶＨＳ）　１巻
国立大学保健管理施設協議会エイズ特別委員会編

◎エイズとともに（ＶＨＳ）　１巻
国立大学保健管理施設協議会エイズ特別委員会編

◎海外向け北海道紹介広報ビデオ（ＶＨＳ）
英語版　１巻・中国語版　１巻
北海道総務部知事室広報課編

課外活動短信

全医体	準硬式野球	優	勝		
〃	弓道	3	位		
〃	個人				
弓道	敢闘賞	3	年	野崎	大司
	5位	6	年	森川	守
	射技優秀賞	6	年	森川	守

今年は、地区体と全医体で優勝することができました。来年も、今年以上の成績が残せるようがんばりたいと思います。野球部に、御支援、御協力下さいました皆様、大変ありがとうございました。

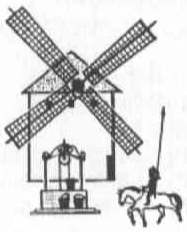
（準硬式野球部主将　高宮　央）

教官の異動

辞職	5.6.10	第二内科	講師	秋山　建兒
〃	5.6.30	放射線医学	助教授	菊池　雄三
〃	5.7.11	第二外科	講師	草野　満夫
〃	5.7.15	整形外科学	助教授	原田　吉雄
〃	5.8.31	耳鼻咽喉科	講師	金谷　健史
昇任	5.5.1	泌尿器科	〃	宮田　昌伸
〃	5.8.1	精神医学	助教授	千葉　茂
〃	〃	第二内科	講師	田中　廣壽
〃	5.9.1	放射線医学	教授	油野　民雄

次号より「かぐらおか」のスタイルがＡ４判になります。

これは文書のＡ判化という社会の流れに合わせたもので、紙面が広くなる分、文字の大きさや間隔等を考慮した余裕のある紙面になります。



窓外

葛西眞一

学会の折、アムステルダムにて

大学に務めていると、学会に出席する機会が大変多い。安給料なので、せめて学会出張の時間だけでもと思うものの、結構物要りで年中火の車である。

発表の為のスライドや原稿などを出発前夜までかかって何とか作りあげ、寝不足の顔で飛行機に乗ってしまえば出来あがり。楽しみ方は十人十色。私の場合はその土地の観光、特に高い所、お城、動物園を中心とした徹底的なお昇りさんスタイル。

今年は７月にアムスへ行く機会があった。ここはいつも通過地点でゆっくりした事がなかったが、正味５日間のうち、丸一日を市内観光にあてる。海面より低い国なのでボートでの運河巡りとなる。ひと通り廻ったあと、かの有名な飾り窓の家の探訪を試みる。ガイドブック通り進むが、世界中の観光客が、それも子供連れでぞろぞろ歩いている様な所に、そんな神秘の館があるのだろうか。その街の入り口はソフトなピンキー風、すぐにハードボイルド一色となる。なる程これがと思いながら進むが目指すものは一向に見当らない。キョロキョロしていると一瞬妖艶な微笑みが建物の奥の暗がりに見えた様な気がして、そのまま後戻りして目を凝らすと、なる程あったと云おうか、居たと云おうか・・・。それにしても真っ昼間に子供連れが行き交う所で・・・。もっと神秘的である事を想像していたのだけれど。その小路を出ると何と王宮がすぐそばにあるではないか。う～ん、参った。

参った事がもうひとつ。旭川で云えば市役所のそばの賑やかな通りにあるレンブラントハウスを見物して外に出た時の事。高校生位の子供達が車座になって道路に座り込んでいるのが目に入った。ふと見ると、何と注射器で腕に薬を廻し打ちしているではないか。誰も何とも彼等を気にしている様子はない。聞けばスイスの他にここも公認だとか。臭い物にはフタをする事を美徳としてきた大和民族には余りにも強烈過ぎて・・・。自由主義、個人主義は何と恐ろしい代償を要求するのだろうか。我々は果たして上手に避けて通れるだろうか。

学会は大変楽しい。この次には山の神もといつも思うのだが、未だに実現しない。この次は・・・。

（外科学第二講座　助教授）